

## 愛知の工業の推移

栗原光政\*

### I はじめに

1909年工場統計報告規則の制定によって、工場主による自計申告制度の工場調査が行われた。当時は職工5人以上の工場を対象とし、調査は5年おきに行われたが、20年よりは毎年調査となり、39年以後は全工場を対象とするようになった。本稿では09年を基準とし、以後10年間隔で、工業の構成比率（出荷額）を求め、工業の推移を考察した。工業統計表では県単位であるので、県統計書によって地区別に集計し、その推移をみたものである。地区別とは名古屋・尾張平野・尾張丘陵知多・西三河・東三河の5地区である。09年から50年までは市郡別に集計されているが、現行の行政範囲とはかなり違って地区別の集計は容易でない。50年以後は統計が市町村別・業種別になっているので集計上問題はない。

戦前、戦後を通じて考察するに容易な方法は地区別の集計しかない。しかし市への合併または独立によって郡の範囲も変化するので、どのように集計するかについて検討した。

名古屋市の範囲も09年と20年とは違い、21年と55年にそれぞれ大合併が行われ、63年と64年にも市域を拡大した。これを正確に組替えることは難しいので、09年から50年までは名古屋市に愛知郡を加えた。愛知郡の大部分は現在名古屋市に合併されており、残っている町村でも50年までは工業生産は多くないのでこれを無視した。09年の県

\* 愛知教育大学名誉教授

統計書には工場名簿があり、旧市町村別に個々の工場が記載されているので、現市域に合わせて集計した。20年の統計書も市郡別で西春日井郡の中に、翌21年名古屋市に合併された町村がかなりある。これは統計上では分離が難しいが、西春日井郡の製糸業は六郷村・金城村にあるので、その生産額は名古屋市に加えた。また西洋紙の工場も西春日井、名古屋製紙と記述されているので、その生産額は名古屋市に加えた。

尾張丘陵の中に東春日井郡と愛知郡の東部が入るが、これも分割して丘陵部に加えることは難しい。そこで20年の東春日井郡の窯業は瀬戸で生産されているので、この生産額は尾張丘陵に加えた。愛知郡の生産額は上述したように名古屋市に加えた。

なお40年と50年の中間に太平洋戦争があり、44年に空襲をうけて県下の多くの都市で、工場施設が破壊された。この戦争が地区の工業をどのように変化させたかを知るために、46年を加えた。

### II 愛知の主要業種とその特化係数

主要業種と特化係数（表1参照）を考察するため、工業統計表を用いて前述の年度に合わせ工業の構成比と特化係数を求めた。工業統計表にある愛知県の統計数値と県統計書の数値とは多少の相違があるが、特化係数を求めるためにあえて工業統計表の数値を使用した。

県の主要業種をみると、09年から30年の期間は繊維工業が60%をしめて首位にあった。これが40

表1 愛知県の工業構成と特化係数の推移（出荷額）

業種	年度		1909		1920		1930		1940		1946		1950		1960		1970		1980		
	構成比	特化係数	構成比	特化係数	構成比	特化係数	構成比	特化係数	構成比	特化係数	構成比	特化係数	構成比	特化係数	構成比	特化係数	構成比	特化係数	構成比	特化係数	
軽工業素材	食料品	14.5	0.78	10.4	0.78	11.0	0.69	7.9	0.77	9.8	0.82	11.1	0.83	8.9	0.72	7.3	0.70	7.3	0.70	7.3	0.70
	繊維	64.3	1.30	63.9	1.48	63.5	1.74	33.1	1.83	14.0	1.51	42.1	1.97	29.4	2.63	12.6	1.97	5.4	1.42	5.4	1.42
	木材・木製品					3.3	1.18	4.8	1.04	6.4	0.62	3.6	0.92	3.3	0.94	3.2	1.00	2.0	0.80	2.0	0.80
	窯業・土石					3.9	1.44	4.6	1.77	11.2	2.80	5.8	1.76	4.8	1.37	4.4	1.22	3.8	0.97	3.8	0.97
	紙パルプ											1.3	0.37	2.2	0.56	2.2	0.67	2.0	0.63	2.0	0.63
小計	78.8		74.3		81.7		50.4		41.4		63.9		48.6		29.7		20.5		20.5		
軽工業加工	服装										1.4	0.82	0.8	0.67	1.2	0.86	1.2	0.86	1.2	0.86	
	家具										0.7	1.00	1.2	1.20	1.8	1.20	1.6	1.14	1.6	1.14	
	出版・印刷					3.4	1.06	0.8	0.62	1.1	0.50	1.8	0.56	1.3	0.52	1.3	0.45	1.6	0.48	1.6	0.48
	ゴム										0.6	0.25	0.4	0.27	1.2	1.09	1.3	1.08	1.3	1.08	
	皮革その他	5.4	0.68	5.6	0.67	1.7	0.50	4.3	1.34	2.7	0.79	1.3	0.87	1.9	0.76	3.0	0.83	3.9	0.95	3.9	0.95
小計	5.4		5.6		5.1		5.1		3.8		6.0		5.7		8.6		9.7		9.7		
重化学工業素材	化学	11.6	0.80	11.0	0.70	3.5	0.23	7.1	0.40	7.0	0.40	4.5	0.35	7.0	0.74	4.1	0.51	4.0	0.48	4.0	0.48
	石油・石炭										0.4	0.29	0.2	0.08	0.2	0.08	3.5	0.49	3.5	0.49	
	鉄鋼										3.6	0.39	5.2	0.49	9.4	0.99	9.6	1.16	9.6	1.16	
	非金属										1.5	0.41	2.0	0.47	2.3	0.52	2.1	0.55	2.1	0.55	
小計	11.6		11.0		3.5		7.1		7.0		10.0		14.4		16.0		19.2		19.2		
重工業加工	金属製品					1.3	0.15	6.6	0.36	14.8	1.01	1.6	0.53	3.0	0.77	5.1	0.94	4.2	0.84	4.2	0.84
	一般機械	4.2	0.44	9.1	0.47	8.4	0.76	30.8	1.30	33.0	1.23	7.3	1.52	7.6	0.97	10.9	1.10	8.8	1.07	8.8	1.07
	電気機械										2.8	0.88	4.7	0.57	4.5	0.42	5.6	0.54	5.6	0.54	
	輸送機械										7.2	1.41	15.1	1.78	24.6	2.34	31.1	2.68	31.1	2.68	
	精密機械										1.2	1.50	0.8	0.73	0.6	0.46	0.9	0.56	0.9	0.56	
小計	4.2		9.1		9.7		37.4		47.8		20.1		31.2		45.7		50.6		50.6		
合計	100.0		100.0		100.0		100.0		100.0		100.0		100.0		100.0		100.0		100.0		
全国に対する県の比率	6.9		6.3		7.5		7.2		7.4		7.1		9.1		9.2		9.6		9.6		

（1909—46年間は5人以上 1909—50年まで工業統計50年史による）  
 1950—80年間は全工場 1960—80年は工業統計表による

年になると33%に半減する。戦時体制になって繊維工業は統制され、生産が低下したためである。さらに終戦翌年の46年は14.0%となった。戦後の衣料不足は繊維ブームをもたらし、50年には40%に復興したが、その後韓国・台湾などからの繊維製品の進出によって国内の生産は圧迫をうけ、80年にその比率は5.4%となった。しかしその特化係数を求めてみると、20年以來80年まで、常に1.40以上をしめ、60年には2.63とむしろ高まっている。80年の繊維工業の出荷額は11,060億円に達し、全国の13.6%をしめ首位にある。これは機械工業の生産が著しく上昇したため、繊維工業の比率が相対的に低下したことにもよる。

繊維工業につぐのは食料品工業である。味噌・醤油・清酒・酢などの醸造業を中心に発展した。このほかビール・乳製品・清涼飲料・パン・菓子などの生産が加わり、消費地指向性の代表的な業種である、その構成比をみると10.0%台から漸次低下し80年には7.3%となった。その特化係数をみると、各年すべて1.0以下で0.70台にある。80年の県の食料品工業の出荷額は15.071億円で、兵庫の17.680億円について全国2位をしめている。それを工業構成比でみると低率となるのは、鉄鋼や機械部門の生産伸長が著しい結果である。

軽工業素材部門の3位にある窯業では、瀬戸・常滑の陶磁器、瀬戸との関連で発展した名古屋の

輸出陶磁器、高浜・碧南の三州瓦などの産地を含んでいる。その業種構成比は46年を除き、4.0%台を前後している。その特化係数をみると、70年までは1.0を上回っていたが、80年に0.97となる。80年の県の窯業の出荷額は7.891億円で、全国の首位をしめ、2位の岐阜の4.681億円を上回っている。これも前者と同様、構成比は低下している。

窯業につぐ木材・木製品工業の構成比は46年の6.4%をピークに、以後は3.0%台から80年には2.0%に低下した。その特化係数をみると、40年まで1.0をこえ、戦後は70年のみが1.0に達しているが、他の年は1.0以下となり、80年は0.80となった。

県の木材・木製品の80年の出荷額は4.025億円をしめ、北海道の4.323億円につぐ2位にある。

上記の各業種はいずれも全国1位か2位をしめて優位にあるのに、重工業部門の著しい伸長によって、工業構成比は低下している。このほか軽工業加工部門で特化係数が1.0以上をしめるのは家具とゴムとである。

家具製造業の構成比は1.0%前後であるが、その特化係数は1.10以上となっている、80年の県の出荷額は3.245億円で全国の首位にある。名古屋市周辺部での住宅建設がさかんなことと関係がある。

ゴム製造業も70～80年の業種構成比は1.0%をこえ、その特化係数も1.08となっている。80年の県の出荷額は2.654億円をしめ、兵庫の2.939億円についている。自動車工業の発展に伴って関連のあるゴム製造業が伸長したものである。

40年の戦時体制下では金属・機械工業の構成比は37.4%となり、繊維工業の33%と肩を並べるに至った。終戦直後46年には47.8%とほぼ1/2をしめている。戦後の50年は衣料不足から繊維工業がかなり復元した。しかし60年の高度成長下に入って機械工業が繊維工業を凌駕し始め、一般機械と輸送機械の両部門の上昇が目立っている。さらに70～80年の輸送機械の特化係数は2.0をこえ、一般機

械が1.10、鉄鋼が80年1.16といずれも1.0を上回っている、従って重化学工業全体としては、70年以後60%をこえている。中でも輸送機械のウェートは高く、単独で31.1%をしめ、戦前の繊維工業に代って愛知の工業を支えているといえる。県の輸送機械は80年に全国の25.7%と1/4以上をしめ、2位の神奈川の16.8%を遙かに凌いでいる。

### III 名古屋地区

この地区（表2参照）も09年から30年にかけての期間は繊維工業が主要業種となっている。その内訳をみると、09年の構成比では綿糸が37.4%をしめている。

これは地元資本で始められた名古屋紡績<sup>1)</sup>・尾張紡績<sup>2)</sup>は共に05年三重紡績に合併され、このほか三重紡績の愛知工場が1893年名古屋に進出し、09年当時上記の3工場で5,928人の従業者を有し713万円の生産をあげた結果である。

09年綿織物の生産は155万円で、地区の8%に過ぎなかった。名古屋の綿織物は県立織工場の設立によって始められ、さらに1891年の濃尾地震によって尾西地方で罹災した企業家が多く名古屋に移り住んで縞木綿の生産に当たった。こうして尾西地方で盛んな縞木綿や絹綿交織の技術が導入されたほか、大陸市場と結びついた白木綿の生産も始められ、尾西につぐ産地に発展した。09年にはすでに毛織物（セルガス）も名古屋地区で生産が始められていた。

第1次大戦勃発により輸出綿布の市場は拡大し、織布工場では原糸の自家生産を図るとか、紡績工場では織布を兼営するとかして、名古屋は綿織物生産の一核心地となった。35年における綿織物生産の46%が名古屋に集中し、知多の25%を遙かに凌駕した。これが40年になると戦時下に入って繊維工業の地区比率は18.4%に低下した。これは拵制された結果でもあるが、他方機械工業の生産

表2 名古屋地区 年度別、業種別比率（出荷額）

業 種		年 度								
		1909	1920	1930	1940	1946	1950	1960	1970	1980
軽工業素材	食料品	9.2	7.2	15.1	11.0	7.5	13.8	11.9	9.3	10.3
	繊維	60.0	42.4	53.4	18.4	5.3	7.5	8.2	4.6	2.8
	木材・木製品	5.1	3.6	4.0	7.8	6.1	6.2	5.2	6.2	3.3
	窯業・土石	7.0	11.5	8.5	5.2	6.9	7.7	4.8	4.0	2.6
	紙パルプ	0.7	1.6	0.8	1.7	1.0	1.7	2.3	2.4	2.4
小 計		82.0	66.3	81.8	44.1	26.8	36.9	32.4	26.5	21.4
軽工業加工	衣服	0.3	3.4	2.0	2.3	1.9	3.3	1.4	2.0	2.3
	家具	0.1	1.1	1.0	0.8	1.9	1.5	1.9	2.1	2.2
	出版・印刷	3.9			1.7	2.6	4.6	2.7	3.6	6.2
	ゴム		0.1	0.2	0.2	0.9	0.9	0.8	1.0	0.7
	皮革その他	0.0	0.3	0.7		0.4	0.5	0.2	0.3	0.5
小 計		7.4	20.8	6.7	9.4	9.4	13.3	9.6	12.4	16.0
重化学工業素材	化学	0.5	1.8	2.9	10.7	6.8	7.3	12.4	5.8	5.8
	石油・石炭	0.3	0.8	0.9			1.0	0.4	0.3	0.3
	鉄鋼	0.4			3.0	8.6		8.0	9.3	8.8
	非金属	0.1				2.7	9.2	3.9	5.8	6.2
小 計		1.3	2.6	3.8	13.7	18.1	17.5	24.7	21.2	21.1
重工業加工	金属製品	0.7	0.8	0.5	4.0	9.8	3.0	5.5	6.9	7.0
	一般機械	2.3	5.1	3.6	9.8	11.7	9.9	9.2	13.9	12.2
	電気機械				2.9	8.1	6.9	6.6	6.0	5.5
	輸送機械	1.5	3.5	2.9	15.6	15.1	9.6	10.6	12.1	15.5
小 計		4.7	0.8	0.7	0.5	1.0	2.9	1.4	1.0	1.2
小 計		9.2	10.2	7.7	32.8	45.7	32.3	33.3	39.9	41.4
合 計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
生産額・出荷額		千円 19,072	万円 24,177	万円 24,193	万円 91,639	万円 274,969	百万円 57,222	百万円 637,165	千万円 184,735	千万円 406,081
全県に対する地区の比率		35.1%	46.3	44.1	51.0	44.4	33.5	44.9	29.1	19.7
繊維工業内訳	生糸	7.0	2.2	2.1	0.1					
	スフ				0.6					
	綿糸	37.4	16.7	13.7	3.3					
	毛糸			2.8	2.8					
	綿織物	8.1	15.1	23.3		3.2				
	スフ、人絹、混交その他				5.6					
	絹織物	0.9	1.6	1.4	0.5					
毛織物	1.3	2.2	4.6	0.1						
その他繊維	5.3	4.6	5.5	5.4	2.1					
計		60.0	42.4	53.4	18.4	5.3				

（愛知県統計書による）

昇によって繊維工業は相対的に低下したものである。なお40年には人絹・スフ織物を始め、混紡や交織毛織物を中心にして各種の織物が出現する。そしてこれら織物の合計額は尾張平野地区の約1/3で、知多織物の生産額をやや上回る程度であった。

09年当時3位にあった製糸業は原製糸の2工場と地元資本の帝国燃糸の工場が大きなウェートを

しめていた。10工場で1,567人の従業者を有し133万円の生産額をあげ、地区生産の7.0%をしめていたが、20年以後生産は低下した。

繊維工業の大工場は戦時中、軍需工場に転用され、弱小工場は整理され、46年は5.3%となった。戦後の50年・60年は僅かの比率を高めたが、他の4地区の様に大きな復元はみられなく、80年には2.8%に低下した。

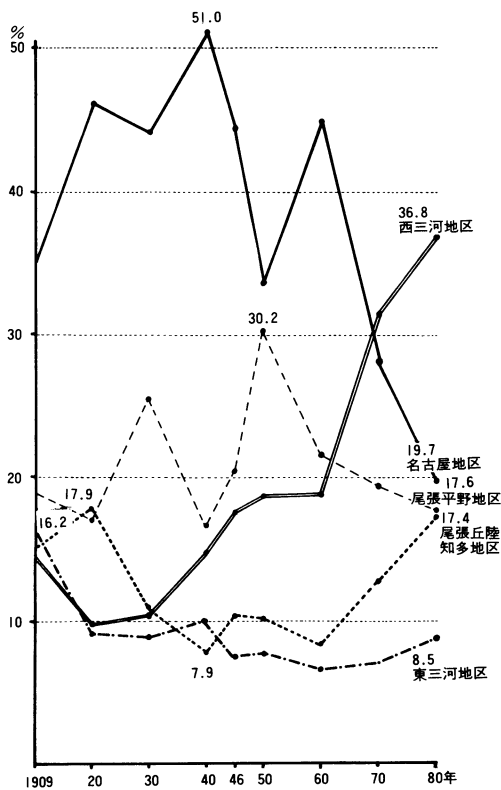


図1 県下5地区の地位の推移

軽工業の素材部門で2位をしめる食料品工業は大消費地名古屋に立地している、46年を除き、30年から80年までほぼ10%内外を維持している。

これに対し木材・木製品工業は6%前後、窯業は5~7%台にあったが、80年に前者は3.3%、後者は2.6%にそれぞれ低下した。また前者は名古屋港西部臨海用地に形成された木材団地に移動したこと、後者は輸出不況によることも低下の要因の一つである。

金属・機械工業は09年すでに県下における一核心地を形成した。時計は当時名古屋に集中立地した。またこのころ需要の高まった汽機・石油発動機・電動機の生産も名古屋に集中し、織機・麵機・車輛・自転車などの工場も名古屋に立地した。

これらの機械工業は40年になると戦時体制下に

において輸送機械・一般機械などを中心に伸長した。特に名古屋地区は、航空機・兵器の全国的な生産基地に発展した。44年当時名古屋地区の工業生産について、戦後アメリカの調査団が来日して調査した結果が公表されている。それによると生産額は30億円で、航空機47.7%・兵器15.3%・金属および金属製品24.0%・電気機械5.4%・車輛1.7%・その他5.9%となっている。航空機・兵器の工場は45年の前半に壊滅的な爆撃をうけ、終戦で生産は停止した。46年の統計は、戦後残存施設を使用して生産を行った時点の状況を示すもので、重工業加工部門が45.7%をしめていた。

50~60年に繊維工業は7~8%台で僅かに上昇したが、80年には2.8%に低下した。

これに対し重化学工業の素材部門は60年以後20%台をしめ、重工業の加工部門も30~40%台に達している。このように名古屋地区の工業は重工業化に向っている。地区の全県の出荷額に対する比率をみると60年の45%から70年29%、80年は20%と低下した。低下した要因についてみると、戦后市内から周辺部に敷地を求め重工学部門の工場が設備の更新と規模拡大を図って移転したこと、周辺部に最新の設備をもつ工場が新設されたことなどによって周辺部の工業生産力が高まった結果である。一方市内に残存する戦時中の大工場が<sup>5)</sup>いずれも規模を縮小し、生産力は低下した。このようにして名古屋地区の地位は低下し、周辺部の地位が上昇したものである。

#### IV 尾張平野地区

この地区(表3参照)では46年を除いて60年まで繊維工業が75%以上をしめ、繊維王国の中核をなしている。繊維工業の内訳をみると、綿織物と綿糸とがその中心をなし、製糸がこれについている。この地区の主要な織物は結城縞・棧留縞<sup>6)</sup>などの縞木綿であった。縞木綿は当初地元産の綿花を

表3 尾張平野地区 年度別、業種別比率（出荷額）

業 種		年 度								
		1909	1920	1930	1940	1946	1950	1960	1970	1980
軽工業素材	食料品	8.2	9.8	5.2	4.4	26.3	6.1	2.9	8.4	9.5
	繊維	86.3	83.5	91.1	79.5	34.4	78.4	75.5	34.2	15.3
	木材・木製品	0.9	0.9	0.6	0.8	1.3	1.2	0.6	1.4	2.8
	窯業・土石	0.5	1.2	1.1	3.8	5.7	2.6	1.1	3.9	4.5
	紙パルプ		0.3	0.0	1.0	0.8	1.5	4.3	4.9	5.3
小 計		95.9	95.7	98.0	89.5	68.5	89.8	84.4	52.8	37.4
軽工業加工	衣服	0.3	0.7	0.2	1.3	1.9	1.0	0.5	1.4	2.1
	家具	0.1	0.5	0.4	0.1	1.5	0.2	0.2	2.0	2.3
	出版・印刷				0.1	0.3	0.1	0.3	0.5	0.7
	ゴム				0.0	0.9	0.2	0.0	3.0	3.3
	皮革		0.0	0.0		0.2	0.1	0.1	0.1	0.1
	その他	0.5	0.3	0.3	0.7	0.8	0.4	0.5	3.1	6.3
小 計		0.9	1.5	0.9	2.2	5.6	2.0	1.6	10.1	14.8
重化学工業素材	化石	2.4	1.2	0.5	2.0	3.5	1.1	0.9	2.3	3.6
	石油		0.0	0.1			0.0	0.1	0.1	0.2
	鉄非	0.0			0.1	1.1		0.8	2.4	3.7
	学炭						0.4	0.6	1.5	2.0
小 計		2.4	1.2	0.6	2.1	4.6	1.5	2.4	6.3	9.5
重工業加工	金属製品		1.1	0.1	0.4	3.0	0.5	0.9	5.7	6.2
	一般機械	0.7	0.4	0.3	1.4	8.3	4.0	4.2	13.8	15.2
	電気機械				0.6	6.0	1.1	4.1	7.2	9.9
	輸送機械	0.0	0.1	0.1	3.8	3.1	0.9	2.2	3.9	6.8
	精密機械	0.0	0.0			0.9	0.2	0.2	0.2	0.2
小 計		0.7	1.6	0.5	6.2	21.3	6.7	11.6	30.8	38.3
合 計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
生産額、出荷額		千円 10,243	万円 8,892	万円 14,069	万円 29,730	万円 126,229	百万円 51,421	百万円 306,778	千万円 124,076	千万円 362,061
全県に対する地区の比率		18.9%	17.0	25.6	16.5	20.4	30.2	21.6	19.5	17.6
繊維工業内訳	生糸	15.4	9.7	5.2	5.0	1.5				
	フ				2.0					
	綿糸	29.5	12.7	8.2	5.7	4.1				
	毛糸			5.3	7.1					
	綿織物	31.5	29.1	15.6		22.6				
	スフ、人絹、混交その他				46.5					
	絹織物	5.3	4.4	5.8	2.3					
毛織物	2.3	23.0	47.5	2.5						
その他の	2.3	4.6	3.5	8.4	6.2					
計		86.3	83.5	91.1	79.5	34.4				

(愛知県統計書による)

原料とした。その後、多量の<sup>かき</sup>総糸が北陸・近畿から導入された。1878年ごろから輸入糸の使用が普及した。これに代ってガス糸が一宮紡績から1895年供給された。この紡績は07年に日本紡績に合併され、09年には、1,039人を数えた。この地区の南の佐織村(町)に津島紡績があり、06年三重紡績に合併された。この2紡績で302万円の生産額(地区の29.5%)をしめた。

綿木綿はさらに絹糸との交織による高級綿木綿の生産に指向した。これは手工業的技術に依存して製品の高級化、多様化をはかって市場の開拓をねらった。しかし近代化の進んだ遠州織物に圧倒され、この危機を毛織物への転換で切り抜けたのである。09年すでに津島の片岡毛織でセルヂスが生産されていた。

09年に綿織物の構成比は31.5%をしめていたが、

20年には29%に低下した。これに対し毛織物は23.0%に急上昇し、30年には47.5%に達し、毛織物が地区生産の1/2近くを示した、40年になると原毛の輸入が減少し、毛織物の生産は低下した。これに代って混紡・交織毛織物が中心となり、人絹やスフの織物の生産も行われた。

製糸業は犬山扇状地に栽培された桑園を基盤に現在の江南市を中心に犬山・扶桑・大口を含む地域に立地した。ここの製糸業は県下で最も古く、1820～66年にかけて、丹羽・葉栗両郡の村々で始められ、1890年ころまで製糸業では首位<sup>7)</sup>にあった。1897年以後は豊橋を含む渥美郡に凌駕されることになる。この製糸業も40年ごろまで地区の5%を生産していたが、漸次統制されて以後低下した。なおこの生糸を原料とした絹織物がほぼ同じ地域で生産された。

戦後の繊維ブームで50～60年は75%台まで上昇したが、80年には15%に低下した、これは繊維不況の影響のほかに、60年以後春日井・小牧・犬山を中心とした尾北地域に多くの工場が進出し、これによって重工業加工部門の比率を高めることになった。その上最近尾西地域で不況のため閉鎖した織物工場跡に電気機械工場が進出し、その比率を高めている。従って60年以後、重工業加工部門の比率が漸次上昇し、70年は31%、80年は38%となった。

この地域を繊維工業の集中する西部と、工場進出の顕著な東部とに分けて、60年と80年とを比較してみた。60年に西部の生産は地区全生産の72%をしめていたが、80年には25%に低下した。従って東部の生産は60年の28%から80年には75%に上昇し地位が逆転した。尾張平野地区の全県にしめる比率は30年の25.6%がピークとなる。繊維工業の比率の高い時に、地区比率も高まっている。戦後の繊維ブームの50年が30.2%と地区比率も高かったが、以後漸次低下し、80年は18%を下回って

いる。

## V 尾張丘陵・知多地区

この地区(表4参照)は知多木綿の生産地が含まれ、46年を除いて09年から50年まで繊維工業が主要業種となっている。知多木綿は当初、地元産の綿花が使用され、農村の副業としておこったことは県内の他の綿業地と同様である。しかし織物の生産が盛んとなるに従い、三河地方から多量の繰綿が移入された<sup>8)</sup>と推定されている。こうした知多木綿は白木綿で、これが松阪で晒木綿となり、江戸に送られた。後に晒の技法が知多に伝えられ晒木綿として地元の買次商の手を経て江戸市場に出荷された。

こうした知多木綿も1897年豊田佐吉の発明した力織機が半田の乙川にある石川藤八の工場に導入され、08年には手機<sup>てばた</sup>を圧倒した。また同年広巾織機<sup>9)</sup>が導入され、17年広巾が小巾の産額を凌駕して輸出向白木綿の産地となり、名古屋商人の支配下に入った。20年綿織物の構成比率が47%に達したのも輸出綿布の盛大だったことを示すものである。

知多木綿に原料糸を供給する目的で、1896年知多紡績が設立された。力織機導入の1年前である。この紡績も07年三重紡績に合併され、09年の規模は1,886人の従業者で175万円の生産をあげ、これのみで地区生産の21.8%をしめ、綿織物業立地に有利な条件をもたらした。

40年の戦時体制下では人絹やスフ織物、混紡の織物が主となった。戦後の復興期に国内需要のみでなく50年には輸出が59%をこえ、60年でも46%<sup>10)</sup>に達した。しかしこの頃から広巾も小巾も生産調整が始まり、さらに構造改善が進められ、80年には2%台に低下した。

繊維工業につぐのは食料品工業である。この中で清酒・味噌・醤油は大野町(常滑市)に始まり、後に半田に移り、東京市場と結びついて発展した。

表4 尾張丘陵・知多地区 年度別、業種別比率（出荷額）

業 種		年 度									
		1909	1920	1930	1940	1946	1950	1960	1970	1980	
軽工業素材	食料品	33.0	12.5	17.2	14.7	22.6	14.7	10.9	7.5	8.4	
	繊維	52.9	72.1	57.6	46.1	8.8	40.8	34.7	7.0	2.2	
	木材・木製品	0.5	0.2	1.8	3.4	3.4	1.9	1.3	0.7	0.8	
	窯業・土石	8.5	9.9	18.5	18.3	25.4	15.1	19.0	10.0	8.2	
	紙		0.1	0.1	0.1		0.2	0.6	1.4	1.2	
小 計		94.9	94.8	95.2	82.6	60.2	72.7	66.5	26.6	20.8	
軽工業加工	衣服	0.0	0.0	0.1	0.4	1.4	0.5	0.2	0.3	0.2	
	家具	0.1	0.9	0.3	0.3	2.7	0.4	0.3	1.2	1.4	
	出版・印刷				0.2	0.6	0.5	0.3	0.6	0.5	
	ゴム		0.1		0.0		0.1	0.0	0.8	0.2	
	皮革		0.0	0.1			0.0	0.0	0.0	0.0	
	その他		0.0	0.4	2.1	1.6	3.1	3.4	2.6	2.9	
小 計		0.1	1.0	0.9	3.0	6.3	4.6	4.2	5.5	5.2	
重化学工業素材	化石	4.4	3.5	2.2	11.0	7.2	8.3	2.7	3.5	5.4	
	石油			0.2				0.3	0.1	19.6	
	鉄鋼	0.0			0.3	8.8		7.5	41.7	30.4	
	非鉄						6.3	0.0	0.1	0.1	
小 計		4.4	3.5	2.4	11.3	16.0	14.6	10.5	45.4	55.5	
重工業加工	金属製品	0.1	0.1	0.7	0.3	4.9	1.5	1.9	3.3	3.9	
	一般機械	0.5	0.6	0.5	1.7	7.7	4.1	6.0	7.8	4.9	
	電気機械				0.3	2.0	0.5	1.2	4.7	4.3	
	輸送機械	0.0	0.0	0.3	0.8	2.4	2.0	9.6	6.7	5.3	
	精密機械					0.5		0.0	0.0	0.0	
小 計		0.6	0.7	1.5	3.1	17.5	8.1	18.7	22.5	18.4	
合 計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	
生産額, 出荷額		千円	万円	万円	万円	万円	百万円	百万円	千万円	千万円	
		8,366	9,334	6,040	14,127	64,012	17,212	119,552	81,490	359,835	
全県に対する地区の比率		15.3%	17.9	11.0	7.9	10.3	10.1	8.4	12.8	17.4	
繊維工業内訳	糸	2.0	0.8	0.3	0.2						
	ス				0.6						
	綿	21.1	23.3	12.4	13.8	0.3					
	綿織	29.0	47.0	43.5		8.0					
	スフ, 人絹, 混交物				29.9						
	絹織物				0.4						
毛織物		0.1	0.6	0.0							
	その他	0.8	0.9	0.8	1.2	0.5					
計		52.9	72.1	57.6	46.1	8.8					

(愛知県統計書による)

酢は酒粕と結びついて半田に立地した。清酒は<sup>11)</sup>その後東京市場を失い生産比率は低下した。

瀬戸の陶磁器、常滑の陶管・陶磁器は丘陵の地下にある粘土層に指向して発展したもので、09年以来10%前後の構成比を有している。

瀬戸は和飲食器の生産地として開かれ、明治以後名古屋の輸出商人の手によって輸向陶磁器が開発された地域である。これに対し常滑は陶管の産地として開かれ、つづいて<sup>まやま</sup>真焼の茶器・花器・

酒器などの生産地ともなった。その後1885年瓶、02年タイルなどの生産が加えられた。

この地区も70～80年に重化学工業の素材部門で鉄鋼と石油の比率が上昇し、工業構成を大きく変化させている。名古屋南部臨海工業地帯に東海製鉄（新日本製鉄）と、石油精製の出光興産・知多石油などが立地し、衣浦臨海工業地帯の知多側には製鋼の川崎製鉄と化学の台糖ファイザーなどが立地して、その生産を高めた結果である。



表5 西三河地区 年度別、業種別比率（出荷額）

業 種		年 度									
		1909	1920	1930	1940	1946	1950	1960	1970	1980	
軽工業素材	食料品	15.6	13.7	11.3	6.6	7.5	7.9	4.6	2.5	2.9	
	繊維	73.4	70.0	75.4	35.8	7.5	48.6	20.7	5.3	2.7	
	木材・木製品	1.7	0.4	0.7	1.3	2.8	1.6	1.0	0.9	0.6	
	窯業・土石	5.1	6.7	5.1	5.6	7.7	3.8	3.2	3.2	2.5	
	紙パルプ	1.7	0.9	0.3	0.7	0.1	1.1	0.2	0.5	0.6	
小 計		97.5	91.7	92.8	50.0	25.6	63.0	29.7	12.4	9.3	
軽工業加工	衣服	0.0	0.2	0.1	0.3	0.5	0.5	0.2	0.2	0.4	
	家版・印刷	0.2	1.3	0.6	0.2	1.8	0.4	0.5	0.8	0.8	
	出版	0.1			0.2	0.4	0.3	0.3	0.3	0.2	
	革		0.2	0.1			0.2	0.0	0.7	1.1	
	その他	0.2	3.0	0.7	0.4	0.8	0.2	0.6	1.6	2.4	
小 計		0.5	4.7	1.5	1.1	3.5	1.6	1.6	3.6	4.9	
重化学工業素材	石油・石炭	1.0	0.6	0.4	9.4	2.5	1.6	4.8	4.5	2.9	
	鉄	0.6		0.2			0.2	0.0	0.2	0.1	
	非金属	0.0			2.0	12.2	1.5	3.0	2.6	3.6	
小 計		1.6	0.6	0.6	11.4	14.7	3.3	8.2	8.0	7.5	
重工業加工	金属製品	0.0	2.0	0.8	3.4	2.4	1.0	0.8	2.1	2.4	
	一般機械	0.4	0.7	4.0	3.4	11.0	9.7	7.5	8.0	6.1	
	電気機械				0.0	6.7	0.4	4.4	2.9	3.4	
	輸送機械		0.3	0.3	30.7	36.0	20.9	47.6	62.9	66.1	
	精密機械				0.0	0.1	0.1	0.2	0.1	0.3	
小 計		0.4	3.0	5.1	37.5	56.2	32.1	60.5	76.0	78.3	
合 計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	
生産額・出荷額		千円 7,873	万円 5,064	万円 5,785	万円 26,427	万円 107,974	百万円 31,495	百万円 262,295	千万円 200,995	千万円 758,670	
全県に対する地区の比率		14.5%	9.7	10.5	14.7	17.5	18.5	18.5	31.6	36.8	
繊維工業内訳	糸	38.3	28.4	20.4	5.6	2.5					
	スフ				3.4						
	綿			23.5	8.8	1.7					
	ガラ紡	12.3	7.4	4.6	2.1						
	綿織物	18.9	24.9	23.1		2.2					
	スフ織物				10.6						
	絹織物			0.1	0.1						
その他の織物	3.9	9.3	3.7	5.2	1.1						
計		73.4	70.0	75.4	35.8	7.5					

(愛知県統計書による)

地区の全県にしめる比率をみると、繊維と食料品の両工業が盛んであった09年と20年は共に15%をこえたが、その後は10%前後となった。80年に17%をこえたのは両臨海工業地帯に鉄鋼・石油などが立地した結果である。

## VI 西三河地区

この地区（表5参照）も09年から30年にかけて繊維工業が70%をこえ、主要業種であった。その内

訳をみると、09年と20年は製糸業が優位であった。この地区の製糸業は明治以降の創業で、山間部では水車動力、平野部では汽機を使用した器械製糸であり、中心は岡崎であった。09年当時岡崎は西三河地区製糸業生産の66%をしめていた。岡崎には菅生川の左岸に三龍社（629人）と岡崎製糸（194人）があり、このほか広幅・六ッ美（以上岡崎）・横須賀（吉良）・平坂（西尾）などにいずれも100人以上の規模の工場が立地した。

安城には11年長野県須坂から山丸製糸が進出し、13年従業者870人を有し、三龍社（998人）と並ぶ大工場であり、生産の中心地を形成した。この山丸も30年に閉鎖し、以後製糸業の地位は低下した。

製糸業につぐのは織物業である。これもこの地区の綿作と結びついた三河木綿が農家の副業として生産され、在郷商人が集荷し、さらに岡崎・西尾・一色・荻原などに在住する買継商<sup>12)</sup>の手を経て江戸・東京市場に送られていた。09年当時岡崎・西尾・大浜（碧南）などに工場が集中していた。三河木綿は経糸に当初は手紡糸、のちに愛知紡績（岡崎）や名古屋・尾張の両紡績からの紡績糸が出回ると、これを使用した。また緯糸には1877年この地方で生産が始められたガラ紡糸を使用した。三河木綿は東京方面に大量に出荷され絆纏<sup>13)</sup>に使用された。その他股引<sup>ももひき</sup>・暖簾<sup>のれん</sup>・足袋の裏地などに用いられた。なお太糸で帯芯や足袋底などの布地も織っていた。この三河木綿も広巾織機が小巾織機を凌駕するのは28年である。これを国内向と輸向に分けてみると30年で68%：32%と前者が優位であった。その後統制され46年には地区生産の2.2%に低下した。

三河木綿に緯糸を供給したガラ紡は、矢作川に流入する郡界川・青木川・乙川などの沿岸で落差を利用する水車動力で始められた。これは手紡糸より能率よく紡糸する簡単な紡機で、機械紡績糸が基礎を確立するまでの間隙について出現したものである。従って機械紡績糸の発展によって市場を追われたガラ紡績は安い原料として屑繊維・故繊維を反毛して糸に紡ぎ、太糸の生産分野を開拓し、帯芯・足袋底・毛布・鍛通<sup>だんつう</sup>・帆前掛などガラ紡糸特有の生産に指向した。これも戦時中統制され、業者は減少した。戦後繊維ブームで県内一円に広がり49年から58年にかけて全盛期を迎えた。その後特紡の進出によって現在は殆んど姿を消してしまった。

綿糸紡績では前記の愛知紡績が国立のモデル工場として1881年大平（岡崎）に設立されたが、火災で消失した。20年岡崎紡績、27年帝国紡績が岡崎に設立され、後に両工場共に日清紡に合併された。30年の綿糸はこの工場の生産によるものである。33年矢作川沿岸にレーヨン工場が立地したが、これも日清紡の経営となり、3工場共戦時中三菱航空機の下請工場となって生産は停止した。

戦後繊維工業は繊維ブームによって50年地区生産の49%に比率を高めたが、その後急速に低下した。これは挙母（豊田）で38年操業を始めたトヨタ自動車工業の影響である。40年に輸送機械は30%に達し、70年には60%をこえた。80年には幡豆3町を除く西三河の全市町村は総て輸送機械の出荷額が1位をしめている。40～45年の間に輸送機械のほか、製鋼・電気・一般機械・精密の各部門の工場が疎開をかねて進出し、重工業加工部門の地区出荷額にしめる比率は46年56%に達した。この傾向は戦後にも引継がれ、60年以後の状況をみるとトヨタ系工場の集中のほか、中京市場を対象とする各種の工場がこの地区に進出した。従って80年には重工業加工部門が78%に達した。地区の出荷額の全県にしめる比率も30年以来上昇し、80年には37%と1/3以上をしめる地位にまで成長した。

## VII 東三河地区

この地区（表6参照）も09年から30年にかけて、繊維工業が70～80%をしめている。その中で製糸業が中核をなし、上記の期間は地区生産額の65%内外をしめている。

製糸業は前述したように丹羽・葉栗両郡が県下の初期の中心地であったが、19世紀末には東三河が製糸業の中核地に発展した。この地区には1876年以来製糸工場が立地し、その核心工場となったのは細谷製糸である。群馬・福島などから優れた

表6 東三河地区 年度別、業種別比率（出荷額）

業 種		年 度								
		1909	1920	1930	1940	1946	1950	1960	1970	1980
軽工業素材	食料品	19.9	10.2	10.5	10.0	34.1	20.7	17.4	14.7	12.7
	繊維	71.9	80.5	80.6	65.9	17.6	56.7	44.8	21.8	9.7
	木材・木製品	3.3	0.8	0.9	6.2	7.2	6.2	7.8	5.7	5.0
	窯業・土石製品	2.2	1.9	2.1	1.2	2.9	2.2	3.0	2.3	2.2
	紙・パルプ		0.5	0.2	0.5	0.4	0.3	0.8	0.8	1.1
小 計		97.3	93.9	94.3	83.8	62.2	86.1	73.8	45.3	30.7
軽工業加工	衣家服	0.1	1.1	0.2	5.0	0.4	0.3	0.5	1.4	1.5
	出版・印刷	0.5	1.6	1.0	0.6	4.0	1.0	3.0	3.7	2.3
	ゴムの他	0.2			0.3	0.4	0.4	0.6	0.7	0.7
	皮革	0.1	0.3	0.3	0.0	0.2	0.1	0.0	4.6	1.5
	その他	0.0	1.0	1.7	1.5	7.7	0.3	1.4	1.9	6.1
小 計		0.9	4.0	3.2	7.4	12.7	2.6	5.8	12.4	12.2
重化学工業素材	石油・石炭	0.6	0.8	0.9	4.5	4.2	6.2	2.7	4.2	3.0
	鉄	0.3	0.1	0.2			0.1	0.0	0.1	0.1
	非鉄				0.4	5.5	0.3	3.5	5.9	6.9
	鋼鉄						0.2	1.5	5.4	
小 計		0.9	0.9	1.1	4.9	9.7	6.6	6.4	11.7	15.4
重工業加工	金製品	0.0	0.8	0.5	0.5	4.4	1.3	2.2	3.0	3.6
	一般機械	0.8	0.1	0.6	2.1	7.9	2.1	6.6	9.6	7.3
	電気輸送機械	0.0	0.3	0.3	0.0	0.2	0.3	0.2	3.9	5.5
	精密機械	0.0			0.7	2.9	0.3	2.9	11.7	22.5
	その他	0.0			0.6		0.7	2.1	2.4	2.8
小 計		0.8	1.2	1.4	3.9	15.4	4.7	14.0	30.6	41.7
合 計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
生産額・出荷額		千円 8,775	万円 4,732	万円 4,807	万円 17,712	万円 45,505	百万円 13,148	百万円 92,411	千万円 44,523	千万円 174,379
全県に対する地区の比率		16.2%	9.1	8.8	9.9	7.4	7.7	6.5	7.0	8.5
繊維工業内訳	生糸	66.5	65.4	64.7	42.4	4.6				
	綿織物	4.7	11.4	11.3		2.0	1.5			
	スフ織物、その他織物					4.0				
	絹織物			0.1	14.1					
	その他織物	0.7	3.7	4.5	0.9					
計		71.9	80.5	80.6	65.9	17.6				

（愛知県統計量による）

器械製糸技術の導入に努めた。これを推進したのは渥美半島表浜の厳しい自然条件にたえた大庄屋朝倉仁右衛門や魚の仲買商の前田伝次郎ら村の指導者達である。09年当時の製糸工場は豊橋市・渥美郡二川町（豊橋市）・宝飯郡国府町（豊川市）・全御津村（町）などに集積している。これは東海道本線の二川駅・豊橋駅・御油駅（愛知御津）などに近接した地域で、製糸業の経営に有利であったことを示している。こうした製糸業も40年に第

1次の整理が行われた。これと関連をもつ桑園も食糧増産のため40～41年にかけて整理が実施され、原料繭の減産となった。さらに太平洋戦争の勃発によって生糸の海外市場を失い、42年には製糸業の第2次整理が行われ、製糸工場数は32年の10%に低下した。

現在操業している工場もあるが、昔日の面影はない。

次に織物業は蒲郡を中心に生産が行われている。

蒲郡地域の織物も綿作と結びついて発展したものである。当初は白木綿であり、小買商の手を経て西三河の荻原の買次商に集められ、江戸市場に送られた。この白木綿も1877年ごろには縞木綿に凌駕され、以後縞木綿の産地として知られるようになった。これは内地向のものを主としていたが、18年ごろから輸出向の織物が急増し、さらに広巾織物が34年には内地向の小巾織物を凌駕した。

37年日中戦争の勃発により、織物は綿・スフの交織となり、さらに強制休業により生産は低下した。41年企業合同が実施され、織機も減少した。43年第2次企業整備による織機の供出にあって、さらに生産は低下した。ただ蒲郡地域は空襲を受けなかったため、工場や施設が残り、復興を容易にした。戦後繊維ブームにより50年は50%台に復元した。しかしやがて全国的に設備過剰をもたらした。55年以後織機の整理と構造改善事業により生産は再び低下した。

繊維工業につぐ食料品工業は46～50年の間を除きほぼ10%台を維持している。味噌・醤油・清酒など地元消費に指向した業種のほか、竹輪などの水産練製品と水飴から発展したゼリー製品、養鶏業と関連をもつ飼料などに特化している。

食料品工業につぐ木材・木製品工業は40年以後5～7%台をしめている。豊橋の豊川沿岸地域はかつて流下する木材を加工する製材業者が立地した。山地からの流下がみられなくなった現在も豊川沿岸に製材業者がみられる。なお外材などが多く利用されるようになると、蒲郡地区や大崎2・3区に木材業者が立地し、この地区の木材・木製品工業を支えている。

次に重工業の加工部門についてみる。34年豊川海軍工廠の設置により、その関連企業の進出によって、この地区に機械工業の比率が漸次上昇し、46年には金属製品4.4%、一般機械7.9%となった。50年にはその比率が一時低下したが、70年になる

と鉄鋼と輸送機械の比率が上昇している。鉄鋼は戦後田原湾の大洲島（航空基地跡）に58年進出した東都製鋼（トピー工業）（現在は大崎1区）である。このほか田原1・2区にかけ進出したトヨタ自動車が79年1月に操業を開始し、80年の地区の生産に大きな影響を与えている。

この地区の出荷額の全県にしめる比率は09年16.2%と高い比率をしめていたのは、県下における製糸業の中心的地位が大きく役立っている。その後糸価の低迷によって地位は低下し9%台となった。さらに46年は製糸業の著しい低落によって7%台に低下した。以後70年代は7%台にあったが、80年にはトヨタ自動車工業の進出によって8.5%に上昇している。

## VIII 要 約

① 愛知の主要業種をみると、09～30年にかけては繊維工業であった。戦時体制下で統制により低下し、戦後の50年1時42%台に復元したが、以後再び低下し、80年に5.4%に低落した。しかしその特化係数は1.42をしめている。その他家具・ゴム・鉄鋼・一般機械はいずれも1.0をこえ、特化業種となっている。

繊維に代って主要業種となったのは輸送機械で、80年は業種構成比31%となり、特化係数も2.68となっている。

② 名古屋地区 09年から30年にかけて繊維工業が首位にあった。40年以後はその比率が10%以下となり、80年に2.8%に低下した。明治になって織物業と紡績業が立地し、県内の一中心地に発展した。戦時中名古屋は航空機生産の中核となったが、それが戦後一般機械・輸送機械の生産に引継がれ、80年には重工業加工部門が40%に達した。しかし地区生産額の全県にしめる比率は45%から20%に低下した。大工場が周辺地で成長したためである。

③ 尾張平野地区 46年を除き60年まで繊維が75%以上をしめた繊維王国である。以後は急速に低下し80年は15%になった。繊維に代って70年から一般機械・電気機械・輸送機械などの比率が高まっている。戦後尾北地方への工場進出がみられたが、地区生産額の全県にしめる比率30%から18%に低下している。

④ 尾張丘陵・知多地区 知多木綿と瀬戸・常滑の陶磁器、半田の食料品が特化していた。知多木綿は70年以後低下し、臨海部に鉄鋼・石油が立地し、80年に地区生産額の全県にしめる比率は17.4%に上昇した。

⑤ 西三河地区 三河木綿とガラ紡の中心地であった。38年拳母（豊田）でトヨタ自動車が操業を始め、60年以後急速に伸長し、80年には輸送機械が地区生産額の66%に達した。地区生産の全県にしめる比率は70年以後30%以上をしめている。

⑥ 東三河地区 戦前製糸業の核心地であり、これに綿業が加わっていた。戦後は綿業が復元したが、80年繊維は10%を割っている。58年トピー、79年トヨタがそれぞれ田原湾の臨海用地に進出し、鉄鋼と輸送機械の比率を高めている。それが地区の全県にしめる比率に反映し7.0%台から8.5%に上昇した。

最後に愛知教育大学の大学院開設に当って来任され、大学

発展のために貢献された榊原康男教授の定年ご退官を記念して、この拙ない文章を呈するものである。(83, 2, 28)

#### 注

- 1) 名古屋紡績は1881年城下豪商らが士族救済の目的で創立され、85年操業した。
- 2) 尾張紡績は1887年周辺農村出身の綿業商人の出資により設立され、89年操業した。
- 3) 県立織工場は1877年士族救済の目的で設立され、士族の子女に広巾小倉・綿ネルなどの新興織物や需要の多い結城縞の技術を伝習する工場であった。
- 4) 名古屋市(1964)：名古屋市爆撃の効果アメリカ合衆国戦略爆撃調査団 58.
- 5) 拙稿(1978)：工業地域の形成と構造 48—49.
- 6) 棧留縞は明和年間(1764—71)西陣から、結城縞は文政(1818—29)ごろ下総から導入され、1840年以後後者が濃尾地方の中心的織物となった。
- 7) 拙稿(1982)：東三河における主要工業の盛衰愛大郷土研紀要27 77.
- 8) 知多織物工業協同組合(1978)：知多織物100年の歩み 13.
- 9) 全上 51.
- 10) 前掲書(8) 147.
- 11) 愛知県(1942)：愛知県特殊産業の由来下巻 8.
- 12) 西尾市(1978)：西尾市史近代4 743.
- 13) 前掲書(12) 783.
- 14) 豊橋市立商業学校(1943)：東三河産業功労者伝 朝倉仁右衛門 107.
- 15) 全上 前田伝次郎 121.